

仁科三湖から黒沼高原・大谷原への植物採集会

草 間 勉

第126回例会は昭和63年9月10日(土)・11日(日)に大町市平区仁科三湖から長野県自然百選に入った黒沼高原(鹿島槍国際スキー場)から大谷原(鹿島川上流)で行われました。参加者は、小口好久、奥原弘人、小林富雄、鈴木恵仁、平林陸男、元島清人、上越教育大の的場の各氏と草間の九名でした。10日から雨でした。中網湖の仲屋民宿に宿し、翌日の天気回復を祈りました。11日(日)は、信大の標本を公開する計画と重なりすぎたためか、参加者が少ない状況の中で、上越からの鈴木、的場のお二人が加わって下さった。しかし、翌朝も雨でした。奥原先生が見に行きたいナデシコがあると言われたので、朝食前に青木湖畔へ出かけた。遠来の鈴木、的場のお二人は、雨の中を夢中で観察と採集をされていた。11日(日)の朝の集合場所の中網湖橋西詰はコウホネが群生しているので写真をとったりしていた。ここへは、豊科から小林氏、大町営林署の元島氏が来て下さった。雨の中での開会をして、奥原先生の知って居られる二、三の珍しい植物を紹介していただけて、会を味のある深いものにもなりました。

まず、中網部落南の山麓の鹿島槍国際スキー場へ登る道端にあった。クロベイタヤがこれで、分布の南限に当たるため重要なもののなのに、土地の人々には知られていないようである。その次に、木崎湖の海の口東北の湖畔にあるというツルアブラガヤを観察した。9月で草丈280cm位に達していた。生育条件に適應するために生理的生態上の変形をして最も旺盛に繁茂しながら群落をなし、それをくり返しているうちに残存して生じたアブラガヤの変種かと思いました。木崎湖の水位も季節によって変化があります。水位が高くなりがちの生育期に特別に著しい伸長するアブラガヤが生じたのでしょうか。

海の口から鹿島国際スキー場になっている黒沼高原に登りました。ここは、すり鉢状の地形で西側だけ低くなっていて、大谷原へぬけている。湿原になっているところが少し残っていた。南側にある山の斜面は西よりが急である。この急な斜面にカタクリの群落があったり、湿原は、スキー場の斜面を造成した時に、押し出した赤土のような土塊に埋りそうになっていた。ゲレンデには牛が飼われている。A新聞社のアンケートによる長野県自然百選の中に、

ここの自然と鹿島岳の展望が選ばれている。湿原の近くにマツムシ草や、ヤナギラン、リンドウの仲間が混じっていた。

黒沢から大谷原へ下る道が大きくなりバスの通行も楽々できるようになっているのには驚いた。

鹿島川に集まる斜面において行くと、オシダ、オオカメノキ、オオカニコウモリ、オオバクロモジ、ノリクラアザミ、アサノハカエデ、ベニカエデ、イワガラミ、イタヤカエデ、サワグルミ、ブナ、タニウツギなどが見られました。北斜面で岩のある部分にホンシャクナゲの群落がありました。

鹿島川の大谷原付近の河川敷の砂地にトガクシコゴメグサが丁度見事に咲いていました。花の時期に来られたことを奥原先生は大変喜ばれたし、各人がシャッターをきって記録しました。

昼前になって、雨が再び降り出しました。その中を営林署ゲートを通りぬけて、車で入ること数キロ。大変助かりました。元島さんの配慮によって開いて貰えて有難かった。しかし雨がまた強くなってきた。致し方がない。少し残念であったが後退、下流に当る釣り池のある鹿島ガーデンまで急いで行った。ここで昼食をした。午後は一応解散、自由行動とした。

ゆっくり時間をかけて見られなくて残念であった。

それぞれ帰路についたが、数人は大町の鷹狩山の中腹にある大町東山低山帯野外博物館という名前になっている植物園へ足を運んだ。ここは低山帯に当る山林をそのままフィールドにしている。草木に名札をつけたり、薬草園をつくったり、周囲から集まってくる谷水と地形を利用して池にし、水生植物やトンボなどの発生に都合のよい場所になっていた。自然観察やキャンプ活動に使う。小鳥も多い所である。遠来の鈴木、的場の両氏と、地元からの元島氏が、最後まで残ってよく見学して居られた。

北アルプスの山麓のこの北安曇郡には、いろいろ珍しい植物が身近なところに残っている。標高差による温度の幅が広いこと。地質的には新、古と複雑である。地形も変化がある。これらの多様な条件によって、微少気象などの環境に適應した植物群落が形成されたのだろう。この植物群落を眺めれば、この土地とこの土地の自然の歴史を読みとることができる。例えば野生の桜の分布に関して見るにつけ、

(41頁へ続く)

天竜川流域における北限地域のカシ林

伊 藤 文 男

F. Ito : Oak forests in their northern limits along the Tenryu River

伊那谷の常緑広葉樹林は天竜川流域に点在している。これらの地域は年平均気温 12°C 以上の地域といわれている。飯田市弁天以北の照葉樹のカシ林の北限地域を調査を行なった。下伊那郡南部の天竜村には、アラカシ、シラカシ、ウラジログシ、アカガシ、ツクバネガシの自然植生が見られるが、弁天以北の地では、アラカシとシラカシの植生であるが、古来の自然植生地は農耕地や住宅地となり、また、アカマツ、コナラ、タケなどの自然林や植林地の二次林となって多くは失われている。カシの植生のみられるのは、天竜川及びその支流の河岸の崖や、段丘崖に、また社寺林にみられている程度である。現存の植生からみて天竜川沿いの飯田盆地の海拔 $500\sim 550\text{ m}$ 以下の地域はカシ林などの常緑広葉樹林に覆われていたと推測されている。飯田市弁天以北の市町村について自然林の北限と思われる上伊那郡南部飯島町、中川村の区間について 205 地点の調査から、現況の一部を報告したいと思う。

カシの分布のみられるのは、段丘崖、河岸、社寺林地が主であって、下伊那地方はモウソウチクやマダケの竹林がこのような地域に多く、カシの自生が竹林内によくみられた。

〈各市町村の状況について〉

飯田市街地のある長姫城跡の段丘崖海拔 450 m にもアラカシ林がみられ構成種のアオキ、ヤブツバキ、チャノキ、がみられた。滝の沢にある白山社の社寺林（海拔 580 m ）はスギ、ヒノキ、マダケなどの林であるが植栽のシラカシの巨木があり大きいのは目通り幹囲 3.15 m もあって林床に芽生えの群生がみられる。座光寺の麻績神社の境内にはシラカシ、アラカシの高木があり大きいのは幹囲 2.25 m がみられた。その近くの民家の竹林内にはアラカシ、シラカシ、ヤブツバキ、チャ、アオキ、ナンテン、ヤブコウジ、シュロなどの植生がみられた。

高森町、松川町（大島、上片桐）の観察地点は64 地点で海拔 $450\sim 550\text{ m}$ の範囲にアラカシ、シラカシが多くみられた。また、ヤブコウジ、チャ、ヒイラギ、シュロなどもみられた。高森町の萩山神社境内から裏山・海拔 $410\sim 530\text{ m}$ のアカマツ林、ヒノ

キ林内にカシの幼木の群生をみる。神社の境内にはヤブコウジの広い群落があり、ヤブツバキ、チャの群落もみられた。

竜東地区（天竜川右岸地区）の喬木村、豊丘村、松川町生田の観察地の68地点からみて、アラカシの植生が多く、シラカシの自生は稀である。民家の庭木にはアラカシの植栽が多い。この地区も構成種のヤブツバキ、アオキ、チャの分布がみられ、稀にナンテン、ヒイラギの自生がみられた。生田の部奈の諏訪神社の境内には植栽されているアラカシの大木があり樹高 11 m で、幹囲は目通り 3.10 m で大きい。

上伊那郡の中川村（竜東側は旧南向村、竜西側は旧片桐村）海拔 $500\sim 550\text{ m}$ にはアラカシが多いがシラカシもみられる。共に住宅地の裏山にあたる段丘崖の下部に多くの林がみられる。ヤブツバキ、チャノキ、アオキなどの自生も多く繁茂している温暖な地である。南向の北島正邦氏宅の庭木のシラカシは巨木で風格がある。目通り幹囲 5.21 m 、高さ目測 20 m 、枝張り東西 17 m 、南北 17.5 m で樹勢もよく県下最大のものと思われる。

上伊那郡飯島町、町内の竜東側の日曽利の地籍にはシラカシの幼木が林内にみられる。当地の古寺の跡地に数本のアラカシの高木が残存していたが、附近にはアラカシの自生が見られなかった。また竜西側の本郷で、海拔 600 m の社寺林にシラカシとアラカシが植栽されて大木になっていたが、その隣接地のヒノキ林内にはシラカシの幼木がみられたがアラカシはみられなかったことからシラカシの方が寒さに耐性が大きいと思われた。飯島町や駒ヶ根市で民家でカシを庭木として植栽してある家がみられた。

現存の植生からみて、古来の自然植生は中川村が北限の地域であると推定している。

（49頁より続く）

（草間原稿より）

池田町広津のエドヒガシ群落、北の方にあるオクチョウジザクラ群落、白馬が中心になるオオヤマザクラ群落、標高の高いところにあるタカネザクラの群落の分布わけは、わたしにとって、非常に興味深い。